

## 『火垂るの墓』

突尾籠なはなしですが、私は毎朝、前日の新聞を持ってトイレに入ります。

産経新聞の「朝晴れエッセー」を読むためです。

たいがい、心が温かくなるようなエッセーで、一日が始まります。

ところが、8月7日のエッセーは、深刻な内容でしばらくトイレから出られませんでした。

そのエッセーを紹介します。

作者は大阪の67歳の女性の方で、私とほぼ同世代です。

『私の父は大正2年広島県生まれ。戦地のフィリピンにて焼夷弾に当たるが、幸いにも九死に一生を得て一時帰国し、岡山で静養していたその時、広島に原爆が投下された。』

学徒動員で軍需工場に行っていた妹が被爆したとの連絡が入り、阿鼻叫喚の焼け野原を2日間捜し回った揚げ句、とある体育館にて「残念です」と告げられ、既に冷たくなった妹を大八車に乗せて帰るしかなかった。

その後傷も癒え、再度戦地につくこととなったその日、日本は降伏、そして戦争は終わった。

おかげで私の命はここにある。

母も広島だ。その日、いつもにも増して明るく「行ってきまーす」と笑顔で軍需工場に向かった一番下の弟が被爆。7人兄弟の一番上の兄も被爆。既に結婚していて身重の兄嫁と母の2人で数日間捜し回ったが、こちらは、両者ともとうとう見つけることができなかった。

黒い雨が降る中、被爆者から水、水と、足をつかまれることもあったそうだが、ひたすら兄弟の姿を捜し求めて歩き回ったという。「怖くなかったの？」と聞いたことがある。「必死やったからね」と寡黙な母はそれだけ言った。

父は96歳まで生き、後を追うように半年後に母も85歳でこの世を去って10年がたつ。

私は4人の子を授かり孫も7人できた。

例年この時期になるとアニメ映画「火垂るの墓」が放映される。

子どもたちがまだ小さい頃、毎年決まってこの映画を見た。

終盤になると、いつも4人そろって「おかん、そろそろやなー」と、笑いながら私を振り返る。

そこには、びしょ濡れになったハンカチを握りしめている私が居るのだ。』

以上全文を転記しました。

私がしばらくトイレから出られなくなったのも理解できるでしょう。

これまで長崎、広島で数々の平和行事が行なわれ、そして当事者から貴重な証言を伺うたびに、胸が熱くなりました。原爆への怒りがこみ上げ、そして強く実感しました。

「戦争の実態を知れば知るほど、平和の尊さに感謝出来る」と。被爆75年を迎えた今、改めて長崎、広島と真剣に向き合う時であると。